

に同情してくれて、明日からは更に一時間早く開けるし月曜日にも出勤して便宜を圖るというてくれた。大恩恵である。以來奇道を踏まず、専念精進して、それでも出發前日の八日の午後には目的を貫徹して全部を抄了することが出来た。晝飯代りに用意のサンドウィッチを頬張り乍ら、筆持つ手を休めなかつたのは勿論、尾籠ながら用便の時間をも惜んだ一週間の辛苦は、恐らく他人には想像の及ばぬ所で、自分自身は兎も角、援けて呉れられた兩君に對して、今尙ほ何とも感謝の辭を知らない。

かくして將來することの出来た資料である。歸來同學の間にこれが尊重せられるのを見るにつけ、自分も聊か鼻を高くすると共に、骨折甲斐のあつたことを喜んだ。ところがどうであらう。その後五年目の大正八年に、永樂大典の蘸字韻の部八巻が東洋文庫の手に入つたが、その中の經世大典站赤の一門は、實にモスコウ本の原本でモスコウ本は有名な徐松がこの本から抄寫させたものに外ならぬことが分つた。がっかりしたですれ全く。序乍ら東洋文庫本はその後立派に複製されて、今學界に珍重されてゐる。

(文藝春秋第十卷第十號、昭和十一年八月三十一日)

## 史料蒐集家としての内藤博士

書齋の中の、また講壇の上の博士の様子は、凡そ博士に接した人の殆んど凡べてが知つて居るところであらう。